

《教育長メッセージ 第7号》

『秋の味覚』

みなさんにとって、「秋の味覚」と言ったらどんな食べ物なのでしょう。

私にとっては、「あけび」「柿」「栗」「きのこ」です。

これらは、子どもの頃、野山をかけずりまわって、自分で採って食べたものです。

有馬小学校で教員をしていた頃、プールの横に一本の柿の木がありました。秋になると、子どもたちとよくプールの横の畑で遊んでいて、子どもたちと一緒に、柿の実を失敬して食べていました。それは、遊作さんという方のものだったらしく、後からですが、許可をいただきました。自分で採って食べるということは、それだけで一味違うのです。

「あけび」と「きのこ」は、秘密の場所がありました。そして、毎年そこに取りに行くのです。「あけび」は、大人は採りませんから、競争相手はいないので、毎年、リュックサックいっぱい採って、腹一杯食べることができました。「あけび」の蔦がからまる細い枝をよじ登るのは、なかなかのスリルで面白かったのです。

「きのこ」は、子どもが場所を知っているということは、大人も知っていて、採りに行くタイミングで後の祭りということがよくありました。学校があるので、日曜日にしか採りに行けず、子どもながらに大丈夫かなあと心配し、そわそわしていました。母が作ってくれる「きのこ汁」が、おいしく、ごちそうで、今でも、私は、「きのこ」が大好きです。インディアン山と呼んでいた山の松林に、私の秘密の場所がありました。

「栗」は山栗で、青いうちに、竹べらでおいて食べました。山遊びをしながら食べていました。渋皮を爪でおくので、秋には、私も友だちも、親指とズボンのポケットが渋だらけでした。あまりおいしいものではありませんでしたが、「柿」とともに、子どもにとっては、簡単に手に入れることができるおやつでした。

『秋の味覚』は、私にとっては、思い出の味です。今の子どもたちにとってはどうなのでしょう。お店で買うのではなく、自分で育てる、自分で採ることが大切なんだろうと、私は思うのです。

次回は、『歌』について、思いを伝えます。

